

感謝の言葉

小倉 慶郎

謹啓

寒さの厳しい日々が続きますが、先生にはお変わりございませんでしょうか。

松島先生が3月にご退任と聞き、私も東京へ駆けつけたい思いで一杯ではありますが、現在要職にあり大阪府立大学の入学試験（3月）とも重なり、直接お会いしてお礼を申し上げられないことをお詫びいたします。

学習院大学英文科の卒業生として先生には深い感謝の念を抱いております。手紙で失礼ですが、一言お礼を申しあげたいと思います。

私が英文科を卒業し、大学院で学んでいた頃、松島先生が着任されました。27年前のことになります。それまでの学習院英文科の大学院は、他大学への専任教員としての就職はほとんどありませんでした。私も大学院修士課程で学んでいた頃、「専任教員の就職は無理かなあ」とあきらめていたものです。この当時までの英文の大学院生の思いはみな同じだったと思います。

しかし松島先生がご着任されてからしばらくして、英文の大学院卒業生の進路に劇的な変化が起きました。次々と専任の就職が決まっていくではありませんか。私はそのころは、学習院から離れておりましたが、いつのまにか学習院英文出身の専任教員が全国に散らばり、一大派閥を形成するのを感嘆して眺めていたものです。関西にいても同志社大学の遠藤徹さんなどから、先生の御高名はお聞きしていました。

学習院英文科がこれほど劇的に変化したのは、ひとえに松島先生のお力の賜物であ

ると深く感謝いたします。私立大学の一学科の卒業生の進路がこれほど大きく変わった例は全国でも稀であるに違いありません。先生の御功勞に感謝の意を込めまして、一言書かせていただきました。

これからもご指導をよろしく願いいたします。27年間、本当にありがとうございました。

不一

追伸

このたびは、ご高著、『イギリス文学・文化論考』をご恵贈くださりましてありがとうございます。私は学習院大学英文科ではラフカディオ・ハーンを中心に勉強しましたので、第2章を特に興味深く読ませていただきました。

2012年2月3日

(大阪府立大学教授)

*本稿は松島先生宛に送付された私信ですが、小倉先生の承諾により掲載させていただくものです。紀要委員会